

上海日本人学校浦東校における国際理解教育と外国語活動の実際

前上海日本人学校浦東校 教諭

茨城県取手市立藤代小学校 教諭 岩崎 康治

キーワード：在外教育施設、上海、現地校、国際理解教育、外国語教育

1. はじめに

上海市は大分県とほぼ同じ面積の中に約2600万人が生活しており、世界中の金融機関が集まるアジア屈指の国際都市である。そこにある上海日本人学校は1976年に在上海日本国総領事館の一室を借りる形で開校した。その後、上海の日系企業進出の拠点でもある虹橋（ホンチャオ）に場所を移した。上海日本人学校浦東校は、平成18年に上海日本人学校虹橋校の大幅な児童生徒の増加に伴い、開発特区の浦東（プードン）に設立された小中併設の大規模校である。敷地2万平方メートル、3万冊の蔵書のある図書館、全天候型のトラックと人工芝のグラウンド、2つの体育館、そして1年中使用できる温水プールと、数ある日本人学校の中でも屈指の設備がある。また、世界で唯一の高等部も同じ敷地内にあり、6歳から18歳までの児童生徒と120名の教職員・現地スタッフがその恵まれた施設の中で“世界一の学校”を目指し共に教育活動を行っている。児童生徒数は1050名、上海日本人学校全体では約2300名在籍している。



「上海日本人学校浦東校」

2. 実践内容

(1) 「現地校交流」

上海市の現地にある小中学校との交流学习を上海日本人学校浦東校では「現地校交流」とよび、国際交流担当職員を中心に毎年計画的に全学年で実施している。現地校に訪問する形態と現地校を招待する形態の2パターンがあり、それぞれ「訪問」「招待」と呼んでいる。

「訪問」の主な計画は基本的に現地校にゆだねられているが、過去に友好の証として、高価な壺などを頂くケースがあった。現在は日本人学校の中国人スタッフも通訳として同行し、交流のねらいをより伝わりやすくするように工夫している。

「招待」は日本人学校担当学年の国際交流担当職員を中心に計画を立て、出迎えから見送りまでを子どもたちの中から実行委員を募り、運営されている。

主な活動は、「訪問」「招待」とともに、以下の通りである。

日本人学校・・・日本文化披露（柔道・剣道等）、合唱（日本語・中国語）、授業体験

現地校・・・中国文化披露（書道、中国武術等）、合唱（中国語・日本語）、授業体験

また、交流させていただいた学校は上海市にあるいわゆる難関校や特色ある教育を行う実験校、そして地域の小中学生が通うことができる公立校など多岐にわたっている。

主な交流校は以下の通りである。

・上海市実験学校しゃんはいしじっけんがっこう ・上海市実験学校東校しゃんはいしじっけんがっこうひがしこう ・甘泉外国語中学校かんせんがいかくごちゅうがっこう ・上南北校しゃんなんきたこう
・上海外国語大学附属中学校しゃんはいがいかくごだいがくふぞくちゅうがっこう ・香梅中学校しゃんめいちゅうがっこう ・進才中学国際部じんさいちゅうがくこくさいぶ

このような、中国で生活する同年代の小中学生との交流から、興味関心のあることが共通していることが分かり親近感をもつ児童生徒、集会などでの拍手の仕方の違いや上履きではなく靴カバーを外履きの上に付けている現地校生を見ることで異文化を感じ取る児童生徒など、国際理解の側面から見てもとても意味のある行事であると言える。加えて最近では、現地校から、行事の共同実施や1日学校体験などの一歩進んだ交流を提案されており、実現に向けてのカリキュラムマネジメントも更に期待できる行事である。

(2) 現地校視察（職員研修）

年に3回、学期末に現地校を視察する機会に恵まれた。現地校交流や中学生中国語・日本語スピーチ大会に参加していただいている学校を主に視察し、授業見学と教師交流をさせていただいた。国際理解教育を行う上でも、このような教員の国際理解を高める研修は必要不可欠である。視察させていただいた中で私を感じたことが3つある。

1つめは、授業形態についてである。基本となる普段の授業の進め方は、教師主導型である。ただ、課題によっては、特別教室やホールなどの場を活用してしっかりと話し合い中心の授業が行われている。普段の授業はどの生徒も高い意欲で授業に参加している。それは、教師の地位が高く尊敬されていることに加えて、宿題や予習で取り組む量が多く、その解説を聞かないとものたないという理由もあると現地校生から聞いた。このような中、国際的な調査（PISA型：OECD生徒の学習到達度調査）において上海は2009年・2012年の2回において3部門（科学・読解・数学）においてすべて1位であった。

2つめは、設備の充実である。視察した多くの学校で、日本の私立学校のような設備を目にした。人工芝のグラウンド、ホワイトボードと併用できる黒板、大学にあるようなイス付きのホール、吹き抜けのある図書館などで生き生きと活動している現地校生の姿があった。

最後に感じたことは、視察させていただいたすべての学校で英語教育に力を入れていたことである。授業はすべて英語で行われ、家で考えてきた内容をスピーチさせる授業を多く取り入れていた。ある中学校では、休み時間に意図的に英語で会話させている学校もあるなど、「話すこと」を重視した取り組みが見られた。

(3) ネイティブによる外国語活動（中国語会話・英会話）

上海日本人学校浦東校では、週に各1時間程度（モジュールでの外国語活動も含む）、中国語会話と英会話の授業が全学年で行われている。語学習得に対する保護者の関心も高く、ネイティブによる語学の授業は好評である。

中国語会話は、普段から中国語を使用する環境にある児童生徒もいれば、全く話せない児童生徒もおり、会話のレベルが様々であることから、習熟度別の授業を行っている。語学学校からの派遣の講師が語学専用の教科書を使って丁寧に授業を行っている。

英会話は、中国語会話と同様に、ネイティブ講師による授業を行っている。中学部では特に、通常の英語の授業と明確な違いを打ち出し、会話中心の内容になっている。季節ごとの英語圏のイベントに関連した会話や、学校やスポーツに関する会話、そして、児童生徒が興味関心のある会話が語学専用の教科書を使って行われる。

このような外国語会話の特色ある授業と、語学習得に対する保護者の関心、そして何より児童生徒の主体的に

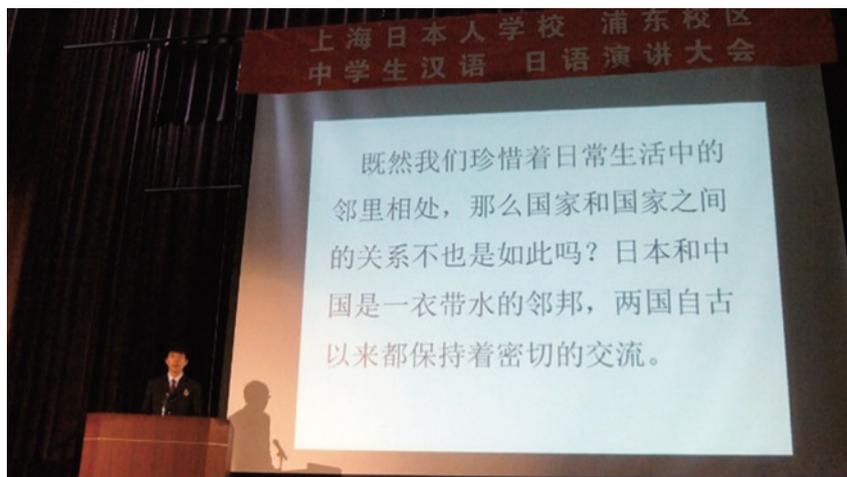
学ぶ姿勢もあって、中国語会話では、2年程度でHSK（中国政府認定資格）の5級・6級を取得することもある。（6級が最高レベル）また、英会話においても、英検2級取得をはじめ、TOEICやTOEFLにおいても高得点をとる児童生徒もおり、グローバル社会を担う人材の育成において核となる語学力の向上を目指した取り組みとなっている。

(4) 中学生中国語・日本語スピーチ大会

「中学生中国語・日本語スピーチ大会」は上海日本人学校浦東校が虹橋校から分かれる前から行われている、昨年度で第22回を数える中学部の伝統的な行事である。「日中の架け橋になる子どもが育ってほしい」という願いの元、毎年上海総領事館の領事をはじめ多くの来賓の方々や保護者を招き、両国歌奏楽から幕を開けるなど、厳粛な雰囲気の中で行われている。日本人学生は中国語でのスピーチ、中国人学生は日本語でのスピーチを行い、両国10名ずつの代表者が「日中友好・国際理解」をテーマに語りあう。

現地校代表者の選考に関しては、現地校に任されているが、日本で行われる日本語スピーチ大会への登竜門とする学校もあるなど、スピーチのレベルは相当高い。また、日頃から日本文化に興味関心がある学生や将来両国の友好に関わりたいと願う学生が出場することもあり、その内容も好意的でとても温かい気持ちになるものや、深く考えさせられる内容のものがある。

日本人学校代表者は、各学年で選考されている。親が中国にルーツをもつ中国語が流暢な生徒も参加しているが、それだけでなく、この大会のために中国語を勉強し、中国語講師と休み時間を利用して練習を重ねながら、出場を目指す生徒もいる。



「現地校生による日本語でのスピーチ（中国語字幕）」

大会の様子を物語る1つのエピソードがある。上海に住んで2年になる中学2年生の生徒は、このスピーチ大会に出ることを目標にしていた。中国語のレベルはそれほど高いわけではなく、学級でもおとなしく何かの代表になることなど今までなかったため、途中であきらめてしまうのではないかと担任や中国語の講師も心配していた。ところが彼の中に秘めたこの大会にかける思いは相当なものであった。できる限りの努力をして、みごと出場を果たした。その努力を知る者は、涙が止まらなかった。その生徒もまた、自分を育ててくれた中国上海への思いをスピーチすることができた満足感で一杯であった。一方、現地校でも同様のエピソードがあると現地校に勤務している日本人教師から話を聞いている。

このように、大会出場に向けた過程をとっても、国際理解・国際交流に向けた学習となっていることからこの大会のもつ意味が大きいと言える。「中学生中国語・日本語スピーチ大会」は世界的に見れば小さな大会ではあるが、グローバルな人材を育てるといった趣旨や、出場するための努力、そして、外国語を学ぶ上での多くの人

とのかかわりなど、この大会のもつ潜在的な熱量は決して小さくない。

3. 在外教育施設への長期研修を終えて感じていること

3年間の勤務を終えて、上海日本人学校浦東校の学校教育目標である「自ら学び 明るく やさしく たくましく 国際性豊かな児童生徒の育成」に貢献することができたのだろうかとあらためて自分自身に問い直した。今回、特色ある教育活動の一環として、日本の学校にはあまりない行事等についてまとめたが、どれも協力してくれた現地校や、日本人学校という母体があってこそのものであり、教師1人で行えるものでは決してない。今後の課題としては、多くの人を巻き込みながら、将来の地球・世界・日本について真剣に考えることができるグローバルな人材を育てていくためには、どのように国際理解教育をすすめていけばよいのかということがある。今の自分にできることは、在外教育施設での経験を伝えていく・活用していくことで児童生徒や同僚に、国際理解の重要性についての認識を高めていくこと、そして共に学びながら、世界平和を目指す理念をもち続けていくことであると強く感じている。

最後にこのような研修の機会を与えてくださった文部科学省、海外子女教育財団、茨城県教育委員会、茨城県海外子女教育国際理解教育研究会、取手市教育委員会、当時の原籍校の皆様、上海日本人学校浦東校とともに勤務した教職員、現地スタッフの皆様、そして3年間勤務を支えてくれた多くの方々に、心から感謝の意を表してまとめにしたいと思う。